屋根

－同窓会だより－

No. 100（平成 27. 8. 15発行）
富山県立魚津高等学校同窓会

1・2面　戦後70年企画
2面　執行部役員　吉澤浩司さん寄稿
3面　「あれから22年」同窓会幹事学年より
4・5面　100号発刊に寄せて
6・7面　屋根で振り返る戦後70年

戦後、七十年を迎えて

日本海シーライン開発㈱
取締役相談役
生駒晴俊
（魚定9回）

〝鐘の鳴る丘〟
緑の丘の麦畑
おいらが一人でいる時に
鐘が鳴ります、キンコンカン
鳴る鳴る鐘は　父母の
元気でいろよという声よ
口笛を吹いて　おいらは元気

終戦後の秋ごろ、ラジオから流れてくるこの歌声を、涙を滲ませ聞いたあの頃、東京の下町で、家族八人の生活は食い物も満足に無かったけれど、小さな幸せな生活でした。それを奪い取る様に空襲が激しくなり、学童達は家族と別れ、空襲の無い県外に学童集団疎開か、縁故のある者は、縁故疎開を強制され、昭和二十年八月十五日、やっとあの忌まわしい戦争が終わったのです。これからはあの恐ろしかった空襲が無くなるのだ。警戒警報のサイレンと共に、素早く防空壕に入らなくともよいのだと、あの苦しかった多くの悪夢が走馬燈の様に駆け巡りました。然しそれよりも、何故、もっと早く戦争を終えなかったのか。昭和二十年三月の九日未明、アメリカのB29が、東京下町に焼夷弾を投下し、二時間で十万人の人達が猛火の中で逃げまどい焼死されたのです。何の罪もない人達が戦争の恐ろしい犠牲となったのです。二度とこんな戦争が無い事を願うばかりです。

戦時中のある日の事です。昼寝でもしていたのですか、ふと人の気がして目を開けると妹の顔が私の顔の前にありました。ハッと夢かと思った時に「晴れ坊が起きたよ」と母を呼ぶ元気な声。夢でない嬉しさがこみあげてきました。「元気かい」と久し振りで優しい母が、末の弟を背負って飛んできました。嬉しかったこと、今、この年になっても思い出すと胸にこみあげてきます。母の実家に預けられて何不自由ない生活であっても、親子がひとときであろうとも一緒にいることの嬉しさは最高の喜びでした。母達が東京へ戻る日を思うとその時の淋しさは…。

支那事変で、鉄砲の弾が左眼から貫通して奇跡的に生命を救われた叔父さんのところに〝召集令状〟が来たのです。傷病軍人（戦闘で負傷した軍人）まで召集令状が来るには戦争も末期だったんですね。そのお陰で、母達は伯父が出征する何日か迄、一緒の生活でした。

東京へ帰る日、母は末の弟を背負い、妹の手を引き、田舎道を足早に去って行きました。その日が親子最後の日でした。私と弟がタンスの陰で泣いていたと祖母から可哀想にと話されました。今思うと、母もどんなにか辛い気持ちであったろうかと思い出されます。〝子や孫をもって知る親の思い〟短い歳月の親子の縁でしたが、二度とこんな悲しい日が無い事を祈り、平和な日本、平和な世界を念じて明るい未来であります様に、東京のどこかに眠る家族の冥福を祈念いたします。

戦争と平和のおはなし会の活動から

おはなしを楽しむ会
代表　大　﨑　惠美子（魚高14回）

「おはなしを楽しむ会」は50代から80代までの16名から成る市立図書館のボランティア団体です。通常は毎週土曜日に図書館内で幼児と保護者に絵本や紙芝居の読み語りをし、一人でも多くの幼児に将来、創造力豊かな人になってもらうための種まきをしています。幼児の真剣な眼差し、その姿に感動し、会員自身が楽しみながら取り組んでいます。

約10年前、市の担当課からの依頼で、夏休み中の小学校へ出向き、被爆体験朗読会として始まり、広島・長崎で被爆された方々の体験記を朗読しました。その年、自宅で体験記を読んでいると地獄絵のような様子が想像され、涙が出て声が出せなくなりました。被爆し奇跡的に助かった人も親兄妹の死を目の当たりにし、自分自身も原爆症と闘いながら生きる辛さは、いかばかりだったか…

朗読会ではＤＶＤを見た後に体験記を聞くので当時の様子が理解しやすいようです。

数年前からは富山の大空襲の体験記の朗読や会員自作の紙芝居もしています。

今年は戦後70年。戦争体験をされた人も、その後に続く世代の人も、若い世代の人に語り継いでいくことが大切だと思われます。

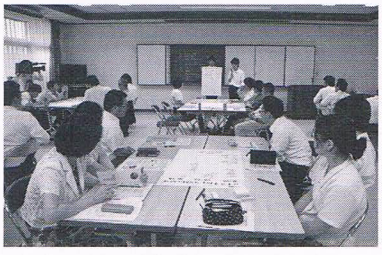
今夏も朗読会を希望される小学校へ出向き体験記を朗読します。戦争の悲惨さ、平和の尊さを感じとり、一人一人が生きていることに感謝できる機会になればと願っています。

魚津市の小学生に読み聞かせをする大﨑さん

日本の平和を守り続けるには

～保護者と生徒が語り合う～

7月4日（土）、記念館90で「日本の平和を守り続けるには」をテーマに30名（保護者6名、生徒17名、ＯＢ2名、教員5名）が参加し、5つの班に分かれて話し合った。会に参加した生徒は、「来年からは選挙権年齢が18才以上に引き下げられる。今後は、主権者としての意識を持って、法改正や、基地問題に関するニュースに耳を傾けていかなければ、と思った」と感想を述べた。



班毎に話し合った
内容を発表する生徒

毎日学ぶことの幸せ

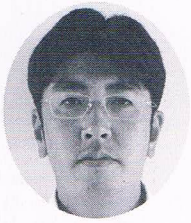
吉澤工業㈱　代表取締役専務　吉　澤　浩　司（魚高41回）

人生90年と考えると既に折り返し地点に到達。これまでの人生を振り返ってみると、高校大学時代が一番学ぶことに対して後ろ向きだったように思う。こうした姿勢であるからこそ結果も当然のようにいつもギリギリの進級、進学。そのことを気にすることもなくバブル経済末期の滑り込みで何の努力もなく就職しました。

この時我が人生の一回目の転機が到来。プラスチック成形メーカーに就職したのですが、これが自分自身にマッチしたようで、自分で言うのもどうかと思いますが、乾いたスポンジが多量の水を一気に吸い込むが如く必要な知識を吸収し、それらを活かすことが出来ました。会社の上司や先輩そして取引先の方々にも恵まれた結果、実績を積み重ねることが出来たのです。多分学生時代に使わなかった脳が2倍ぐらいの速度で働いてくれたのでしょう。

そして２０００年の春に東京の会社を退職、実家が経営する会社で働くため帰郷。都会のサラリーマンとは１８０度環境が変わりました。この時が２度目の転機。郷里では仕事をしながら、様々な地域活動に参加。こうした活動が自分自身と合っていたようです。しかしながら、これまでの経験や持ち合わせた知識だけではなかなか活動についていくことが出来ず、学びたい、もっと様々なことを身に付け役に立ちたいという欲求を強く感じました。結果、たくさんのことを先輩や仲間から学ぶことに。ちなみに先輩や仲間には魚高ＯＢの方々が多く、特に可愛がってもらっています。

人生の折り返し地点に立っていますが、多くの人から学び、そして学んだことを活かしながら過ごせる近頃の日々を幸せと感じています。



校歌に思う

新川高校　教諭
濱元克吉

高校時代は本当に楽しかった。こんな時間がずっと続けばいいなと考えた結果、教員を目指すことにした。夢？であった教員になることはできたが、現実は甘くなく、フラフラになりながら何とか今までやっている。

仕事で悩んだときには、原点に戻り魚津高校で過ごした時間を振り返る。ニヤけながら遠くを見つめ、美化した思い出に時々照れ笑いをしてエネルギーを蓄える。

頭の中での回想場面で流れる曲はもちろん校歌である。魚津高校の校歌はいつ聴いても背中あたりから独特なゾクゾクっとくる感じが込み上げ、全身にじんわりと広がる。この感覚は同窓生しかわからない感覚であると思う。他校の校歌とは違い、ゆったりとした感じがよい。

魚津高校の校歌には一番大事であるはずの校名が入っていない。校名を入れなくても魚津とわかる校歌。魚津高校の歴史と伝統はおそろしいと思う。こんな魚津高校に負けないライバル校をつくろうと、私は魚津市内の私立高校に勤務している。

魚高入学から四半世紀

花王株式会社　安全性科学研究所
第2研究室　第3グループ
米澤恵子

高校を卒業して二十数年、いよいよ不惑の年を迎えます。高校生のとき、四十歳といえばもう完全な大人！と感じていましたが、いざ自分がその年を迎えてみると、びっくりするぐらい精神面は成長していません。肉体的な衰えは日々痛いほど感じていますが・・・。当時、きっと今の私より年下の先生もいらっしゃったと思うのですが、実に広い心で指導していただいていたんだなと、改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、私について少しご説明しますと、高校卒業後は北海道にある大学に進学して関東で就職し、一度の転職を経て現在は家庭用品メーカーの研究員として、神奈川県小田原市で働いています。今回、自分のこれまでをざっと振り返ってみましたが、魚津高校に入学したことがやはり人生の分岐点の第一歩だったと感じます。生まれて過ごしてきた土地から少しだけですが離れ、新しい世界に触れた感覚を今でも覚えています。それがその後の進学、就職、現在の研究職につながっているんだと思います。いまだ心の迷いは多いですが、これからもあの第一歩の感覚を忘れることなく、新たなことにチャレンジしていきたいと思います。

仕事を通じて知る〝母校〟

㈱新川インフォメーションセンター
吉本育子

「魚津高校出身ですか？」と聞かれるとつい、「いえ、魚津α高校です」と答えてしまいます。自分へのもどかしさばかりが募り、同級生たちのキラキラとした「魚高生、青春ど真ん中！」な雰囲気になんとなく馴染めなかった高校時代。今も魚高卒といえる自信がありません…。

しかし、魚津のケーブルテレビに勤めて早10年以上が経ちます。番組制作を通して出会うのは、地域社会で活躍する魚津高校の先輩方や、仕事に家庭に奮闘中の同輩、そして新しい時代を若い感性で生きる現役魚高生たちです。

戦後70年の今年は、旧制魚津中学の学生だった大先輩から、戦時中のお話を聞く機会が得られました。英語を学ぶことが憚られた時勢に、それでも必要なものだからと教えてくれた先生の存在や、ピアノの上手な生徒にクラシックを演奏させ、先生自身は遊びに行っていた（という証言でした！）エピソードを聞き、苦しい時代でも自由な校風を守ろうとした先人たちを知ることができました。

また、「東北の今を知ろうプロジェクト」という取り組みも取材しました。これは、一人の魚高生の呼びかけで動き出した被災地との交流事業です。社会に関心を持ち主体的にかかわろうとする後輩たちはとても頼もしい存在です。

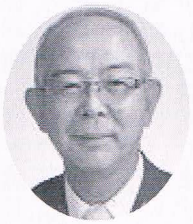
魚高のはぐれ者だったはずの自分が今、母校の歴史や伝統、そして未来を伝える仕事に就いているという不思議な縁を感じます。

気仙沼高校生と魚津高校生との交流会を取材する吉本さん

祝 100号発行に寄せて

在校生に期す

同窓会長
千田則行（魚高13回）



この度、私達魚津高校同窓会の機関紙である「蜃窓」が一〇〇号目の発行となります。一言で一〇〇号と申しますが、その経過は、これに携わった多くの方々の御苦労を思う時、大変な歴史を刻んだ事を思い知らされます。近々、創立一二〇周年を迎える本校ではありますが、そこに至る長い歴史を形づくり、築いてこられた、幾多の校友や先生方の事を忘れる事はできません。

現在の日本は、終戦後、七〇年という節目を迎え、「平和憲法」のもと、多くの反映を享受して来たわけですが、近年、周辺国の発展と共に、無視出来ない周辺事態への対応が必要となって来ております。

何時の世でも、国の安全保障が大切なのは云う迄もありませんが、戦争で多大な犠牲を出した我が国に於いては、慎重で、わかり易い議論を尽くして、自国の安全を守る体制を作り上げていく必要があると思います。

今、日本は人口減少が現実のものとなり、社会問題となりつつあります。

云うまでもなく、人口の減少は生産年齢人口の減少と、高齢化した人達の社会保障の問題につながり、何処の自治体も、その対策に頭を悩ましているのが現状だと思います。

自治体だけでなく、企業も雇用対策は大きな課題で、我が国の将来に不安を残している状況にあります。

こうした中で、今の高校生は貴重な存在であり、彼らの考え方次第で、国の将来をも左右すると考えます。

どうか、在校生の皆さん方も、そうした視点を踏まえて、自らの進路を決めていただきたいと思っております。

呉東の雄たる魚津高校の存在価値を高める意味に於いても、在校生の覚悟を求める次第であります。頑張って下さい。

変わらない心

校長
國香正稔（魚高26回）

第百号、おめでとうございます。

創刊号は、昭和二十六年十二月の発刊で、A5判四十二ページ、色刷り表紙や写真ページを備えた立派な冊子である。魚中・魚女、魚実に魚高と、4つの同窓会が統合され、新しい時代が始まる喜びが伝わってくる。

「魚高百年史」を参考に、創刊当時の本校のようすを少し整理してみた。昭和二十年八月に終戦、新制高校は二十三年四月からスタートした。当初は男子高と女子高に分かれていたが、九月から、男女共学の魚津高校になった。校舎は魚女・女子高のあった今の魚津西部中学の場所である。というのも、魚中の校舎は二十一年二月の火災で焼失し、男子校は仮校舎での授業だったのである。

今の場所で新校舎落成記念式典が行われたのは二十五年一月二十八日。新しい同窓会の発足が決議されたのも一月であった。

二十六年十月には宇田新太郎博士（魚中十二回生）が講演し、岩田栄治校長の依頼に応えた一句「明るい協力　撓まぬ勉強」が校訓に制定された。宇田博士は八木・宇田アンテナの発明者である。この「蜃窓」の創刊が同年十二月で、新しい校舎の写真が載っている。「富山湾・・」の校歌の制定は翌二十七年の動きであった。

その後、二十八年五月、本校は、またしても火災で校舎を失う。もう一度新校舎落成記念式典が行われたのは三十年一月である。現校舎は昭和五十四年に教室棟、五十六年に特別棟が竣工している。

講堂だけは、二度の火災にめげずに残っている。鉄筋コンクリートの講堂は昭和十二年に完成したもので、職芸学院の上野教授によれば、富山県庁と同じように、国指定有形文化財にふさわしい、存在感あふれた建築物だということである。昭和十二年（一九三七）以来、さまざまな出来事を知る存在でもある。

「蜃窓」創刊を経て第百号に至る活発な同窓会活動や、大切に使われ続けてきた講堂は、校歌や百十歳のヒマラヤ杉とともに、魚高のシンボルである。ものではあるが、心を現している。校舎や制度は移り変わっても、変わることのない存在である。

掃除する魚中生

創刊の辞

會長　佐竹清吉

六三制の學校改革により、魚津中學校魚津高等女學校魚津實業學校は解体せられ、新たに魚津高等學校は設立せられたり。茲に於て前身三學校の同窓會を合流して魚津高等學校同窓會設立の議起り、遂に昭和廿五年一月廿三日其の実現を見るに至れり。斯くして生れたる吾が同窓會は其沿革実に五十年に近く、會員數も一万人に及ぶ此の半世紀に於ける世の變遷も甚しく、各會員には色々の思ひ出に物語も多く亦奇談逸話も少なからず。中には是非に後進に傳ふべき事柄も多からん因て各クラス毎に代表的の寄稿を求め、本誌を發刊する事になれり。希くは本誌を通して會員相互の連絡と親睦を計り、以て本校發展に寄與せんと欲す。今後更に刊を重ね以て大成を期せんとす。會員各位の一層の御協力を願う次第であります。

（明治三十七年魚津中第二回卒業、開業醫、下新道下村村木）

創立60周年ころの魚高正門附近

蜃窓で振り返る 戦後70年

創刊号表紙

思い出の詩

高島　高（魚中26回）

聲ふるわせてもうとうか
かの浪淘汰のごとき旅よ
かのいのちよ
かの生涯よ
人の世は切なくあれど
回想の花園はたのし
つねに小鳥はうとうか
つねに陽はきらめくか
つねに樹々は緑なすか
季節は春
季節は爛漫
もう一度われをよらしめよ
かの日の學窓のおばしまに
友よ
師よ
春の歌よ
もう一度われを臥せしめよ
かの若草萌える
加積なる堀ばたの堤に
わが夢はかえる
わがのぞみはもどる
光きらめき
今も尚
青春はさゝえる
あゝ青春は呼ぶのだ

G先生の思い出

中谷唯一（魚高1回）

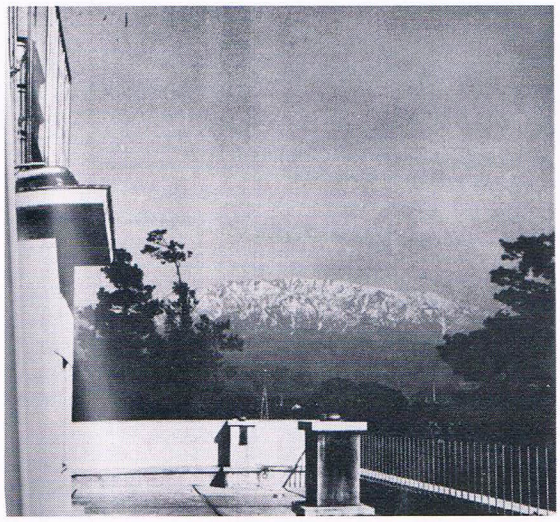
在学生の皆さん、ハイ・レベルの学習や多用なクラブ活動に、大変活発に取り組んでおられ、数々の輝かしい成果を挙げておられますこと、まことにご同慶に堪えません。

さて、寄稿の機会を頂きましたご好意に感謝して、厳選した一つを述べさせて頂きます。魚中時代の昭和18年だったように思いますが、さきの大戦で日本が守勢に転じざるを得なくなりました。各前線での敗戦から沢山の兵員や兵器、艦船、航空機を失ったからでしょう。そのための補充に、年令の幅を広げ、職業や体格、体力に無関係に、赤紙という召集令状を多発しました。赤紙をもらった人は、慌しく、家や職場や勤務地を離れ出征していきました。私たちの担任の先生も本籍地の軍隊に入られ戦場へ急行、不帰の人となられました。当時、英作文担当のG先生も赤紙によって魚中を去られたお一人です。今も変わらないグランドで、全校生徒・教職員（軍隊から配属されていた現職の将校も含め）の整列する前で、「私は無事に帰ってきたいと思います」と、言葉少ないご挨拶を残して発たれました。私は、なんと女女しい方なのだろうと軽蔑の眼で見上げ、激しい怒りを感じました。当時は総ての人が、一死奉公、生きて帰らないと誓った時代でした。

日本帝国の敗北、降服。被占領、新憲法、戦争放棄、平和・文化立国、とくに主権在民や人権尊重、男女平等などかってない変革の体験や新教育のおかげで、G先生への軽蔑が一変しました。むしろ、自分の浅はかさに、体内の血液を残らず入れ換えたいとさえ思いました。後年、G先生に偶然お遭いし、心の底からお詫びを申し上げ心が晴れました。

人間の尊厳、平和の大切さ、教育の厳しさを、深く且つ最優先して考えるようになりました。過去にも現在にも、母校にはそうしたヒューマンな先生が絶えません。

執筆当時は富山大学教授
第48号（平成元年八月発行）より



僧ヶ岳遠望（旧図書館屋上より）

近頃の学生

愛場公一（魚高5回）

高校を終えてほぼ二ヶ年の同輩の学生生活の一断面（皮相的か知れません）を紙上の一隅を借りて語ってみたいと思う。

近頃の学生はあまり勉強しないと云われるが、勉強そのものについては、就職が心配になるのか一応やっているらしい。しかし何か一つのものに徹底しているという学生は少ない。これは高校についても昔と比較されてよく云われる事であるが、語学は絶対他にひけを取らぬとか、カントを語らせば誰にも負けまいといった連中はほとんどいない。皆あたりさわりのない勉強しかやっていない。学問の表層をなでているにすぎない。勿論、一杯のコーヒーで三時間もねばりながら、社会の腐敗に悲憤慷慨し、文学を論じたりはする。下宿でサツマイモをかじりながら歌ったり、叫んだりはするが、青春の感激とか何とやらでそれだけに終ってしまう。

大学の中には色々な研究会や趣味サークル等が多いが、割合このような会合に参加している人は少ない。富大にいるH君などは卒業以来ずっと高校の後輩に対してラグビーの指導に余念がない。先日京大にいるM君に会ったら、ガニ股でちょこちょこ歩いて来る。どうしたのかと聞けば、馬術部に入っているそうである。北海道辺まで遠征して来たそうだ。

中でも異色なのは、中央大学の

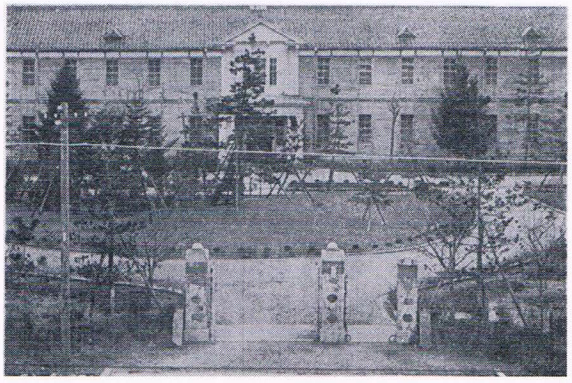
魚津高校界隈（昭和43年）

N君H君であるが、応援団部に籍を置いて居り、おととし位だったか、魚津高校の野球の応援に手並のほどを示してくれた。もうそろそろ大学のボス的存在にならんとしており、「愛される応援団を作る」と意気を示している。聞いてみると、現在あまり一般の学生からは、好感が持たれていないそうである。女の子にもなかなかつわものが居る。お茶水大のMさんは、「歌声は平和の力。」とかのスローガンをかかげる歌の会のリーダーとして若い情熱を余すことなく吐露しているらしい。各地へ出掛けて歌って歩くそうな。平和という言葉が出たので、ついでだが、マルクスでなくちゃあかんと左転したものもいる。（別に平和運動は共産主義者の専売ではないが）

こういう連中と話をしていると、明日にも革命を起さねば、日本の国が救われないように聞こえて来る。同輩の中で平和運動や、学生運動に熱心なものはほとんどいない。現実の社会情勢から自分自身にせまる危機はやはり意識している。例えば再軍備の問題にしろうかうかしていると再び銃を取らねばならないようになるんじゃないかと。しかし、つまらぬ事で就職などに関係すれば困るという日和見型が多いのは、消極的な魚洋の住民の気質から来るのかも知れない。

その反面、若い情熱を正義と自由と平和を守ろうという悲愴な決意のもとに地道に動いている連中も二三居る。こういう連中は労働者等と趣味サークルや研究会などを作って、話合いながら一歩一歩と努力している。このような動きをやっている学生が近頃の学生の中でも最も期待すべき人達であり、明日の日本の建設に役立ちうる人材じゃないかと、私自身も考え、友人達とも話し合っています。

執筆当時は富山大学在学中
第2号（昭和三十年発行）より



旧魚女校舎

旅行は何年か続いて四国に行き、金比羅詣りの帰船から直径30㎝位の樽のぐるりに全員の名を書いて流したとか。でも拾った人からの返事を頂いた事があったのか聞きもらしましたけど。

昼は一生懸命畑作りして、東京の恩師やら内田吐夢さん、孫の所へ木の折りを積み重ねて持って行くのが楽しみで、トマト等毎日通っている鼻の先生やら町の親類、知人の所へは私が持って行かされ、店で買う味と違うと喜ばれるのがうれしくて。そんなに作らなくてもと言えば、枯れたりしたら困ると用心深く。

ボクの言う事する事をすなおに聞いて実行してくれるのは、畑と定時制の生徒だと、私への皮肉の様でした。

よく働き、きれいに逝ってしまった十四年。私はぼやぼやと長らえています。

第66号（平成十年八月発行）号より

回想

黒川　みよ（魚女4回）

真夏の様な日が有るかと思えば、肌寒い朝があり、梅雨らしい雨の日も少なく、夏は猛暑と報じている。八十六才のばばはその内逝なくなるけど、後に残った人達は？と思いやられます。

私の戦後は何回転したか、今昔を思い出します。夫は満州より引揚げてきて、県の教育会に該当者がいないからと、故意に三人の追放者の中に入れられ六年間。追放解除の明くる日から、長い間待って下された魚津高校に、教諭として二十年近く。定時制の生徒さんが好きだ、とても真面目に通って来て、皆それぞれ社会に出て立派な人間になっていると。時には自分以上の年の方もあったのではと思われましたが、息子の様に喜んで自慢話をしていました。スポーツが好きで、体操の先生じゃなかったのかと笑われ、ラグビーの選手と一緒に全国大会に意気揚々と出かけ、何年間かお正月は私一人で祝っておりました。

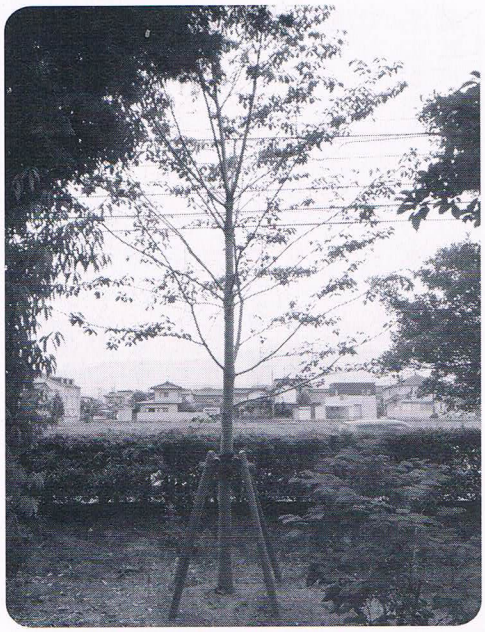
創立百二十周年記念に向け
桜の木植樹

事務長　松本史朗

多くの同窓生にとって、青春という黄金時代を回顧し、友とともに歩んだ自分の半生を振り返るとき、その脳裏に浮かぶのは、学習・部活・淡い恋心…いろいろなドラマがあったであろう教室や体育館、グランド等々だと思う。

本校は昭和二十一年の校舎全焼など幾度もの火災に見舞われた。だが、幸いにも、本校には未だに健在を誇る昭和十二年五月完成の講堂がある。この講堂と見事なまでに調和するグランド周りの老桜木の植え替えが、昨年の同窓会総会にて決定された。一期工事として、倒木の恐れがあるグランド周辺のソメイヨシノ六本と、前庭に二本の成木を新たに植樹した。

明治三十二年五月から続く本校の三十年後の姿が目に浮かぶようである。


前庭に植樹された桜の木

魚高生の活躍（平成２７年４月～８月）

写真部
■第39回全国高等学校総合文化祭
奨励賞　政二　康文

放送部
■第54回富山県高校放送コンテスト
アナウンス部門　優秀賞２位　高橋　梨奈（ＮＨＫ杯出場）
テレビドキュメント部門　優秀賞２位（ＮＨＫ杯出場）
朗読部門　優秀賞３位　岡本　涼花（ＮＨＫ杯出場）

将棋部
■第51回全国高等学校将棋選手権大会富山県大会
女子個人戦　準優勝　澤井 彩乃　（全国大会出場）

ダンス同好会
■全国高等学校ダンスドリル選手権大会　甲信越大会
男子ヒップホップ部門　２位（全国大会出場）

陸上競技部
■第54回北信越高等学校陸上競技対抗選手権大会
女子400mH　５位　滝川 絢香（インターハイ出場）

水泳、ソフトテニス、柔道、陸上（やり投げ、走り幅跳、三段跳、４×400Mリレー（男女）、女子1500M、男子400mH）が北信越大会出場

高校総体男子４×400Mリレー

高校総体男子やり投げ

今夏の魚高ナインは
優勝校高岡商業と初戦対決

富山県立魚津高等学校同窓会
〒937-0041 富山県魚津市吉島945番地
TEL（0765）22-0221
FAX（0765）22-9970

同窓会ホームページ
http://www.nice.tv.jp/~gyokou/index.html
魚津高校ホームページ
http://www.uozu-h.tym.ed.jp/